



ラオスへのありがとう

慶應義塾高等学校 3年 川口 博也

ラオス研修での一番の学び、それは社会の根底にある愛情と互いに感謝をする心構えである。一週間毎日愛情と感謝の精神を感じていたが、特にホームステイの一日は愛情と感謝に満ち溢れていた。

ホームステイをさせていただいた家庭は9人の家族に加え、2人の友人も来て、11人の大所帯であった。大雨と蠅に晒される外部の台所。そこで私達は夕飯を共に用意した。一見劣悪な東南アジアらしい環境だが、家庭の作り出す懇篤で温和な空気によって、そこは至福の場へと変貌した。

この家族は文句ひとつ言わず、皆協力して夕飯をつくる。家族というのは親しい分配慮を忘れがちであると思う。だが、ここには確かな愛情と敬意が見て取れた。

極め付きがラオス人の口癖、ポーペンニャン（気にしない）だ。私が恐ろしく団子作り下手で夕飯を作り終わるのが21時となっても、団子の形が滑稽でも、皆ポーペンニャンと言い、むしろ手伝ってくれてありがとうと心から笑ってくれた。

繰り返すが、これはラオスで私が受領した愛情と感謝のほんの一端だ。

愛情と感謝。文字に起こすと、こんなにも短い。だが、これを競争社会の日本やシンガポールで生活した私は忘失していた。今、文をしたためるこの瞬間も自分の愚かさから胸がしめつけられる。だがその一方、ラオスの人々から得た愛情が胸中に満ちている。

この愛情と感謝の心を東京の時の濁流と雑音に呑み込ませはしない。

ラオスの皆さん、本当にありがとう。